

## 米の匂いと家族への思い

中央财经大学  
趙瑜佳

私は電気炊飯器で炊いたご飯より、かまどで炊いたご飯のほうが好きだ。なぜならば、そのご飯にはおじいさんの匂いがするからだ。

私は5歳からおじいさんとおばあさんと一緒に暮らしていた。おじいさんの家は古いの  
で、炊飯器などの電化製品どころか、コンセントすらなかった。だから、ご飯を炊くのは、  
かまどでしかできなかった。周りは土や石、セメントなどで固めて、大きな鍋をかけて、  
下から木を焚べながら炊いていた。毎日、小学校の授業が終わって、家に帰る途中、遠く  
に見える煙突からもくもくと煙が出ていた。それを見ると、ワクワクして早く家に着きた  
かった。

早くご飯を炊くために、おじいさんはそばに小さい送風機を取り付けて、火を強くして  
いた。こうして炊く時間もずいぶん短縮させることができた。しかし、年をとったので、  
おじいさんは匂いを嗅ぐ力がだんだん鈍くなってきたようで、時々焦げたご飯を作るよう  
になった。その時、私は「おじいさん、もう黒いご飯は食べたくないよ」と冗談めいたこ  
とを言った。おじいさんは「やれやれ、また焦げてしまったのか」と言いながら、送風機  
を止めた。おじいさんは毎回鍋で炊いた一番美味しいご飯を私に食べさせてくれた。自分  
は鍋の底に残っている焦げたご飯を食べていた。食べきれなかった時には、翌日の朝ご飯  
にするしかなかった。健康には悪いと分かっているけど、おじいさんはとても儉約家で、残  
ったご飯を捨てることは一度もなかった。

小さい頃の私の記憶では、おじいさんはずっと質素に暮らしていた。ご飯を食べる時、  
おじいさんはいつも一番早く食べ終わって、私が食べ終わるのを待って、茶碗に残ったご  
飯をきれいに食べ切った。少し大きくなったら、私もおじいさんのように、茶碗には一粒  
のお米も残さない習慣になってきた。それだけでなく、私にとって、もう一つ大切なこと  
は、おじいさんから習った床に落とした米粒の処理方法だ。私の不注意で、米粒を落とす  
ことが今でもたまにある。もし何もしないと、人に踏まれたら、靴にも床にもついてベタ  
ベタになって、とても困ってしまうだろう。ところが、おじいさんはご飯を節約しながら、  
ある動物にも満足させることができるというような一石二鳥の方法を思いついた。それは  
落としたご飯の粒を拾い上げて、食事が終わったあとで、家の前にある小川に投げ込んで、  
魚に餌をやることだった。私たちにとって、この米粒はもう汚れすぎて食べられなくなっ  
たが、小川の魚にとって、それは美味しいものかもしれない。だから、「ゴミになったと  
しても、使い道によって役に立つ可能性がある。勝手にご飯を捨てるな」と今でも肝に銘  
じている。

おじいさんは嗅覚が弱くなったにもかかわらず、節約しながら、いつも美味しいご飯を  
作ってくれていた。もし誰かに「あなたが一番好きな食べ物は何ですか」と聞かれたら、  
皆さんは海の幸であろうと、山の幸であろうと、いろいろな答えが出てくるかもしれない。  
しかし、私にとって、どんな高級料理であっても、やはりおじいさんが手作りしたお米の  
団子には及ばないのだ。小学校の時、家は学校に近かったので、私は家に帰って昼ご飯を  
食べていた。午後の授業に戻る前に、おじいさんは少し焦げているご飯で団子を作って、  
砂糖をかけた。孫が午後お腹が空いたら、すぐに食べられるだろうと思っていたようだが、  
私はお腹が空くまで待てずに、学校に行く途中でもう食べてしまった。

今ご飯を炊くのはとても簡単なことになっている。研いだお米を炊飯器に入れ、電源を  
入れた後、何も心配せずに、美味しいご飯が出来上がるのを待つだけでいい。でも、昔の  
ように、かまどの前に座って、火の加減を見守るおじいさんの姿はもう見られなくなって、  
懐かしいと思うしかない。かまどで炊いたご飯にはご飯そのものの香りだけでなく、おじ  
いさんへの思い出も綴られている。

もう一度昔へ戻りたい。